応援歌　作詞　中村重夫　補作 土井晩翠　曲 旧制二高（仙台）ボート部応援歌を借用

一

常南 一角 風起り
利根の川波 すさぶ時
蛟 竜 いまや 雲を得て
飛躍の姿 永劫の
命をさけぶ もののふの
意気と力の 雄々しさよ

二

六つの花散る 冬の日も
黄金をとかす 夏の日も
臥薪嘗胆 鍛えこし
鉄腕 一度 地になれば
鬼神閻羅も 影をひめ
さとしの光 照らすなり

三

人生 意気に感じては
そも 我が前に 敵やある
勝利の大旆 白幡の
台 上高く 押し立てて
九百健児 諸共に
いざや 歌わん 弥栄を

応援歌の制定

大正７年（1918）９月30日、応援歌が制定された。作詞は中村重夫（当時旧制二高生・中14回）で、第二高等学校教授・土井晩翠による補作をうけたものである。(『星霜百年白幡台』980ページより)『星霜百年白幡台』によると、「曲は旧制二高ボート部応援歌の曲を借用したものである。」とある。

明治33年４月（1900)、本校の前身である龍ケ崎中学校が開校し、創立18年目を迎えた大正７年（1918）という年は、本校にとってどういう年であったのか。大正４年に朝日新聞社が中学野球の全国大会を主催し，野球熱が高まっていく。それまで東京で行われていた関東全府県大会が、この７年から京浜大会と、残る五県による関東大会とに分離した。龍中野球部がその第一回関東野球大会で千葉師範学校を６対２で退け、見事優勝し、現在の全国高等学校野球選手権大会、いわゆる甲子園大会（当時の名称は「第四回全国中等学校優勝野球大会」であった）への出場を獲得した年だったのである。

しかしながら、米騒動により大会は中止となってしまった。当時は甲子園球場はまだなく、大会会場であった兵庫県の鳴尾球場から帰校する野球部諸君はもちろん、学校関係者、保護者、地域の人々の胸中を察するに余りある。奇しくも、世界で流行した新型コロナウィルス感染症拡大防止対策で全国の様々な大会やコンクールなどが中止となった令和２年（2020）からさかのぼる約100年前のことである。さらには、この年、世界的インフルエンザとなったスペイン風邪が我が国に伝わり、大正10年にかけて大流行したのである（患者2380万人、死者約39万人に及ぶ)。そのような状況の中でも、龍中健児はまさに「臥薪嘗胆」して、その年に続き、翌年からの４年間も優勝し、見事５年連続出場を果たすことになった。「勝利の大旆」をこの白幡台に「高く押し立てて」、「弥栄」を皆が声高らかに歌いあったことが眼前に浮かぶようである。当時の竜ケ崎町の様子が、創立90周年記念出版の『母校賛歌　－わが青春の竜ヶ崎一高－』（常陽新聞社刊）につづられている。

「大正八年の第二回関東大会は竜ケ崎町で開かれた。（中略）さあ大変。町内の旅館はわずか四軒。参加三十余校の選手と応援団を収容しきれないから料理屋もにわか宿舎。お寺やソバ屋、氷屋まで宿を振り当てられたがまだ足りない。他校の応援団は民宿した。」（42ページ)。町を挙げての支援が始まり、白幡台の正面石段の手前、数十メートル隔てたところに住む龍中ファンの「おかくばあさん」の心温まる話も登場する。「龍中関東四

連覇が危ぶまれた大正十年の夏、おかくばあさんは深夜、秘かに（学校下の階段左手の）道祖神にお百度詣りして“必勝”を祈願した。翌十一年も『若いピッチャー桜井数枝にご加護を』とまたお百度を踏んだ。」（48ページ～）。次年度の関東大会開催地は「前年の優勝校所在地」と決まっており、本校が連覇を続けていたので「夏になると竜ケ崎は町中落ち着かなかった」のである。

その野球部の黄金時代を築き上げた人物の一人が初代野球部長の西村初太郎（にしむらはつたろう）氏である。『星霜百年白幡台』「第一部百年の歩み（通史編）、第二章龍ケ崎中学校の発展期（大正期）、第三節野球部の黄金時代」には以下の記述がある。

「初代の遣沢恒猪校長は明治三十七年頃ごろから『健全なる精神は健康なる身体に宿る。よろしく心身を鍛錬し、勉学に励むべし。』と述べられている。この教育方針に則り、野球に関心のあった校長と負けん気の強い情熱家の西村初太郎部長とのコンビにより、龍中の野球部は急速に強化された。」（123ページ）

その西村初太郎氏と作詞者である中村重夫氏の関係が136ページに明らかにされている。

「大正七年九月、私が第二高等学校に入学して仙台に下宿していたところ、突然西村先生から手紙が来た。『お前、歌を作るようだから、応援歌を書いてよこせ』との命令。これには驚いた。先生の気質を知っている私は、作らないわけにも行かず、入学早々の落付かない毎日であったが、一節六行、四節構成の応援歌を作り、曲まで付けて送った。それが、『常南の野に雲荒れて、利根の川波狂う時、見よ蛟竜の雲を得て、・・・・・・・・・」の歌である（70周年記念誌には『利根の川水狂うとき』とある）。西村先生のお気に召したこと驚くばかり、御自身で指揮棒を取って全校生徒に歌わせ、応援させたそうである。時あたかも龍中野球部の名がまさに天下にとどろかんとする頃でもあったので、この応援歌は幸先よろしく大いに歌われた。私は中学時代、漢文が得意であったためか、妙に漢文口調の歌だが、その後、長く歌われたかしら。」（中村重夫（中14回）東北大学名誉教授）

作詞者の中村重夫氏は龍ケ崎中学校を卒業（旧中14回）し、旧制第二高等学校（東北大学の前身）に入学したばかりであった。そして、その後、東北大学名誉教授になられた人物である。原文が現在の歌詞と微妙に異なっていることがわかる。それを教えてくれているのが138ページの引用者注である。

「中村先輩の応援歌作詞の由来を補足すると、『曲まで付けて送った。』とあるが、この曲は、当時東北大学医学部在学中の武藤完雄先輩に相談して、同氏が旧制二高時代ボート部であった関係上、『旧制二高ボート部歌』の曲を借用したといわれている。また、作詞も急いで作ったので、その後、二高の英語教授であり、恩師の土井晩翠先生にお願いして手を加えてもらった歌詞が、現在まで長く歌われている応援歌である。」

ここに登場する武藤完雄氏は旧中11回卒の東北大学医学部長を務められた方である。また、補作をお願いした土井晩翠氏は、ご存じのとおり、詩人、英文学者、東北大学名誉教授で、あの『荒城の月』の作詞者である。

西村初太郎氏と親交が深かったのが「学生野球の父」と呼ばれ、「一球入魂」という言葉でも有名な飛田穂州（とびたすいしゅう）氏である。飛田氏は西村部長の頌徳（しょうとく）碑（功績・徳をほめたたえる碑）のために揮毫（きごう）（筆で書く）してくださった。その碑に次のような文字が刻まれている。

「偉（い）なるかな　西村精神　連続優勝　実に五回　　昭和三十七年四月　飛田穂州　書」

西村先生の碑は野球グラウンド北端で球児たちの練習をいつも見守ってくれている。

応援歌	解釈
一	
常南(じょうなん) 一角(いっかく) 風起(おこ)り	常陸国(ひたちのくに)南部の一角であるこの龍ケ崎の地に風がわき起こった。
利根の川波(かわなみ) すさぶ時	新しい時代を呼び起こす風は、白幡台の南に滔々と流れる利根川の流れに波を勢いよく巻き起こし、
蛟竜(こうりゅう) いまや 雲を得て	成竜になろうとしている蛟（みずち）が、今まさに、わき起こった風によって生じた雲を絶好の機運としてつかみ取り、
飛躍の姿 永劫(えいごう)の	川面を躍り上がり飛び去って，天に向かって昇っていく。
命をさけぶ もののふの	その姿は、未来永劫の生命を叫び続ける武士のごとく、
意気と力の 雄々(おお)しさよ	気概と力強さの、いかにも雄々しいことよ。
	我らが学び舎が設置され、それはまるで風がわき起こったが如く，新たなエネルギーとなってこの白幡台に新しい時代を生み出していく予感を抱かせてくれる。蛟(みずち)が成龍にならんとして悠々と天を目指して昇っていくように、生徒たちも将来に向かって大きくたくましく成長していく。
【語釈】	
1　常南(じょうなん)	1　常陸国(ひたちのくに)の南部。
2　蛟竜(こうりゅう)	2　「こうりょう」「こうりゅう」とも。中国の想像上の動物。まだ竜にならない蛟(みずち)。
3　永劫(えいごう)	3　非常に長い年月。永久。
4　意気	4　いきごみ。気概。
二	
六つの花散る 冬の日も	六弁の花のように結晶する雪が舞い散る､寒さ厳しい冬の日も、
黄金(こがね)をとかす 夏の日も	黄金色に輝く太陽を溶かしてしまうほどの、灼熱の夏の日も、
臥薪嘗胆(がしんしょうたん) 鍛(きた)えこし	自らの目標を成し遂げるために臥薪嘗胆して、心身を鍛えながら日々を送り、
鉄腕 一度(ひとたび) 地になれば	その鍛え上げてきた鉄のような強靭(きょうじん)な腕力、力量をひとたび、

	大地に振り下ろすと、
鬼神閻羅(きじんえんら)も影をひめ	鬼どもや閻魔大王も恐れおののき、姿を隠してしまうほどであり、
さとしの光 照らすなり	神仏からのお告げを示す神々しい光が我らを明るく照らしてくれるのだ。
	春夏秋冬、四季折々、将来、志を成し遂げんがために日々精進する龍中健児たち。心身ともに鍛錬に邁進(まいしん)し、その充実させたエネルギーをひとたび発揮すると、何物も姿を隠し、健児たちは神々しい光に包まれる。

【語釈】

5　六つの花	5　雪の異称。六弁の花のように結晶することからいう。
6　臥薪嘗胆(がしんしょうたん)	6　敵を討つために長い間苦労すること。将来の成功を期して艱難辛苦(かんなんしんく)すること。（中国の故事による、出典『十八史略』）
7　鉄腕	7　鉄のように強くたくましい腕、技量。
8　鬼神(きじん)	8　「きじん」（呉音）と読み、荒々しく恐ろしい鬼の意。「きしん」（漢音）は天地万物の霊魂。
9　閻羅(えんら)	9　死者の生前の罪悪を審判し、罰するという地獄の王。閻魔大王。
10　さとし（諭し）	10　神仏のお告げ。

三

人生 意気に感じては	自らの人生を、人のために誠を尽くす使命として気概に感じる龍中健児たち、
そも 我が前に 敵やある	そもそも、その我らの目の前に敵となる相手などいるであろうか。いや、敵に値する存在などいない。
勝利の大旆(たいはい) 白幡の	皆でつかんだ勝利の大きな旆を、この白幡台の地に
台(だいじょう) 上高く 押し立てて	高々と押し立てて
九百健児 諸共に	無敵の龍中健児が一堂に会して、勝利をともに喜びあい、
いざや 歌わん 弥栄を	さあ、声高らかに歌おう。ますますの繁栄、栄光を願って。

自分はどう生きるのか、自分はどうあるべきか、常に自らに問い続ける。白幡台の学び舎で心身ともに成長を続ける龍中健児たちが、胸を張り、正々堂々と新しい時代を切り開いていく。栄光を目指して。そういう意気込みが伝わってくる。

【解釈】

1　や

1　①　詠嘆・呼びかけの間投助詞の「や」
　　詠嘆　　～だなあ。～ことよ。
　　呼びかけ　～よ。
　②　疑問・反語の係助詞の「や」
　　疑問　～だろうか。
　　反語　～だろうか。いや、～ない。

2　大旆（たいはい）

2　①　堂々たる旗印。
　②　日月と昇竜・降竜とを描いた大きな旗。昔、中国で、天子または将軍が用いた。

3　弥栄（いやさか）

3　「弥」ますます。　「栄」栄えること。繁栄すること。

4　九百健児諸共に

4　この解釈は難しい。大正７年当時の在籍者数は455人（５月１日現在）であり、多数という意味で語調のいい数字に整えたと受け取れるが、「九百」という数字の根拠が不明である。中村氏による原文のこの一節が見当たらないが、土井晩翠氏が群馬県立太田高校校歌で「金山の麓に集ふ九百の子等よ勉めよ朽ちせぬ名」と作詞しており、土井氏の補作の一部とも考えられる。土井氏の作詞には「数百の健児」（山形米沢高等工業学校）、「健児は八百」（新潟加茂農林高）、「幾百の健児」（北海高）、（岩手医科大）、「幾百の子ら」（東京医科大）などの例が見られる。